

千葉市立青葉病院 診療科別臨床研修プログラム 病理診断科

I. 研修プログラムの目的および特徴

病理診断部門は、組織診断等で各種疾患の診断を支えるのみならず、臨床医学・医療の質の保証、改善の重要な手段のひとつとして病院医療の中で欠くべからざるセクションである。青葉病院における病理研修プログラムは、当院が第一線の地域中核病院であり、症例数も豊富である特性をいかし、各種疾患の病理学的基礎を理解するとともに、将来の専攻分野にかかわらず、病理学的根拠に基づいて客観的に臨床が実践でき、生涯にわたって自己研鑽を積むことができる良質の医師を教育することを目的とするものである。

本研修プログラムの具体的実践目標は以下の通りである。

- (1) 診断に必要な適切な検体処理を安全に行うことができる。
- (2) 病理形態所見、細胞診所見の基本的判断ができる
- (3) 臨床像、病理所見から鑑別疾患を想起し、鑑別診断ができる
- (4) 病理学的問題点に対して問題対応型の思考を行い、その解決を図ることができる
- (5) 臨床症例に関するカンファレンスや学術集会に参加し、症例呈示と討論ができる
- (6) 稀少症例について学術雑誌に報告できる

II. 研修指導医

研修責任者	窪澤 仁	病理科統括部長
-------	------	---------

III. 研修プログラム

本プログラムは2年目の後半に、選択科研修の一環として研修できる。研修コースは下記の3コースであり、研修施設は千葉市立青葉病院病理診断科のみであるが、他施設の見学や他施設での研修についても可能な限り、相談に応じる。研修期間中は指導医によって、教育・評価が行われる。

短期コース : 1～2ヶ月間

中期コース : 3～5ヶ月間

長期コース : 6～7ヶ月間

IV. 研修内容と到達目標

1. 一般目標

- (1) 病理解剖を通じ、疾患の病態と本態との関連を総合的に理解する能力を習得する。
- (2) 細胞診断の必要性・重要性を理解し、所見の基本的判断ができる能力を習得する。
- (3) 組織診断の必要性・重要性を理解し、所見の基本的判断ができる能力を習得する。
- (4) 症例をカンファレンス、論文で適切に報告できる能力を身につける。

2. 行動目標

- (1) 病理解剖

- ① 病理解剖の目的と必要性・意義を説明できる
 - ② 病理解剖の法的手続き、関連する法的諸問題について説明できる
 - ③ 臨床経過から病態上の問題点を説明できる
 - ④ 肉眼所見、組織所見と臨床病態との関連を説明できる
 - ⑤ 症例報告ができる。
- (2) 細胞診診断
- ① 細胞診の目的と必要性・意義を説明できる
 - ② 臨床経過から病態上の問題点を説明できる
 - ③ 適切な検体処理ができる
 - ④ 細胞所見を把握・理解し、細胞診断ができる
 - ⑤ 症例の報告ができる
- (3) 組織診断（術中迅速診断を含む）
- ① 病理組織診断の目的と必要性・意義を説明できる
 - ② 臨床経過から病態上の問題点を説明できる
 - ③ 肉眼所見から病変の肉眼的診断を行い、鑑別疾患を列挙できる。
 - ④ 標本から診断に必要な「切り出し」を行うことができる
 - ⑤ 適切な検体処理ができる
 - ⑥ 病理組織所見を把握・理解し、診断に必要な特殊染色、免疫組織化学、電子顕微鏡的検索、in situ hybridization, polymerase chain reaction 法など分子生物学的手法について理解し、適切な選択を行い、これを実行できる
 - ⑦ 病理組織所見と特殊検査の結果を総合的に判断して、最終診断を行うことができる
 - ⑧ 病態に応じた適切な報告を行うことができる
 - ⑨ 症例の報告ができる
- (4) カンファレンス・発表
- ① CPC（臨床病理症例検討会）レポートを作成し、症例の呈示を行う
 - ② 稀少症例、重要症例を学術雑誌に投稿する

3. 経験すべき検査・手技

- ・ 剖検
- ・ 切り出し
- ・ 病理組織標本・細胞診標本の作製（包埋、薄切、一般染色）
- ・ 組織化学的染色
- ・ 免疫染色

V. 評価法

1. 病理研修プログラム終了時に、指導医の総意に基づき指導責任者により総合評価が行われる。
2. 指導医により、各到達目標に対する評価が行われる。
3. 研修医は、各到達目標に対する自己評価表を提出する。